

九州天皇家論 2章 天孫降臨

出雲王朝征服譚

古代出雲王朝

小倉北区は弥生文明の先進国

豊葦原中國という国名は女王「豊」が支配する葦原中國という意味である。「豊」は伊豫二名嶋(彦島老町)の女王だった。この女王は「伊豫」と「豊」という二つの名前を持ち、故に「二名嶋」と呼ばれていた。大八洲の國名に「豊」とあるのはこの女王の支配國だった証拠である。天照大神以前に彦島及び関門海峡の港町を支配していた偉大な女王であった。「豊の葦原中国」とは小倉北区に存在した弥生国家である。現代地図を詳しく見れば小倉北区には神代説話に登場する地名が目白押しなのである。



- (1) 「豊葦原中国」は「なかつくに」と訓む。「なかつ」とは「中津」である。小倉北区には「中津口」がある。「足原」とは「葦原」である。
- (2) 「宇佐」と言う地名がある。天照大神と素戔鳴尊は「ウケイ」で三人の女の子と五人の男の子を得た。五人の男の子は手許において「天原」を統治させた。男の子の一人は素戔鳴尊が正哉吾勝と云ったので勝速日天忍穗耳尊という名前となった。彼が高皇産靈尊の娘と結婚して生まれた子どもが瓊瓊杵(ニニギ)である。三人の女の子は、葦原の中国の宇佐嶋に降らせた。その地が小倉北区の宇佐である。宇佐嶋という表記から、天照の時代はここが湾の中の島であった。
- (3) 「八幡東区」には、「諏訪」の地名がある。國譲りをめぐって大國主命の子、建御名方神が建御雷神と戦い、負けた建御名方神が「科野国・州羽(すわ)の海」まで逃げた。建御名方神が逃げた「州羽(すわ)」は八幡東区の「諏訪」である。「諏訪」のすぐ西は洞海湾である。「州羽(すわ)の海」が洞海湾である。建御名方神は信州・諏訪まで逃げた訳はない。現在は長野県・諏訪の話となっているが、元は九州天皇家の諏訪、小倉北区の話である。

では、「豊葦原中国」はどのくらいの規模の弥生国家(集落)だったのであろうか。確定は無理だが推測は可能である。上の地図に「中津口」という地名がある。ここが中津への出入り口だったのであろう。ということはここが「葦原中国」の東の境界であろう。西と北は確定できないが「葦原」という地名から考えるとその地は紫川の河口である。西は下津ぐらいだったのであろうか。現在の小倉北区の中心が「豊葦原中国」だったと思われる。この國は多くの村に分かれていた。東征に出発する前の神武の言葉がそれを裏付ける。

遂に邑に君有り、村に長有りて、各自境を分ちて、用て相凌ぎきしろはしむ

神武は小さな村が分立している様を嘆いている。そして、神武は瓊瓊杵王朝の正統の君主として国家統一に乗り出すのである。瓊瓊杵尊が降臨し、開拓に努力した「豊葦原中国」は神武が東征に成功して畝傍山の麓に都を建設するまで瓊瓊杵王朝の中心であった。

稲作の先進地帯

天照大神は「月夜見」に一つの任務を与える。

豊葦原中国に保食の神有りと聞く。いまし、月夜見尊、就きて侯よ

「保食神」の死体から、「粟」「蚕」「稗」「稻」「麦」「大豆」「小豆」を得る。この時すでに、「葦原中国」では粟・稗・麦・米・大豆・小豆の五穀栽培は行われていた。「豊葦原中国」は、故に「千五百秋の瑞穂の國」であった。天照大神は粟・稗・麦・大豆・小豆を「陸田」に植える。「稻」は「水田」に植え「粳種」を取り、苗を「狭田」「長田」に植えて、秋には穂が実る。「天国(あまくに)」に水稻が始まったことをつたえる。

天孫降臨は出雲王朝への侵攻

豊葦原之千秋長五百秋の水穂国は、我が御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らず国ぞ。

天照大神は大國主命に「葦原中国」の支配権譲渡を迫る。当時この土地は出雲王朝が支配していた。出雲王朝を拓いたのは素戔鳴尊である。「高天原」から追放処分にあった素戔鳴尊が「櫛名田姫」と所帯を持ったのが「出雲の清地(すが)」である。

天国(あまくに)で「非行」を繰り返した素戔鳴尊は天国(あまくに)を追放される。天照大神の御所は老の山公園となっている丘だった。ここが「高天原」とるばれた高地弥生集落でした。素戔鳴尊は「高天原」から追放さ

れてどこへ行ったのか。日本書紀が伝える場所はいくつかある。

- (1) 是の時、素戔鳴尊、天より出雲国の簸の川上に降到ります。
- (2) 一書に曰はく、是の時に、素戔鳴尊、安藝國の可愛の川上に下り到ります。
- (3) 一書に曰はく、素戔鳴尊の所行無状し。故、諸の神、科するに千座置戸を以てし、遂に逐ふ。是の時に、素戔鳴尊、其の子五十猛神を師いて、新羅國に降到りまして、曾戸茂梨の処に居します。乃ち興言して曰はく「此の地は吾居らまく欲せじ」とのたまひて、遂に埴土を以て舟を作りて、乗りて東に渡りて、出雲國の簸の川上に所在る、島上の峯に到る。
- (4) 一書に曰はく、素戔鳴尊の曰わく「韓郷の嶋には、是金銀有り。若使吾が兄の所御す国は、浮寶有らずは、今だ佳からじ」とのたまひて、乃ち髭を抜きて散つ。

素戔鳴尊が降った國は小倉南区

素戔鳴尊が「天(彦島)」から行ったという國は「出雲國」「安藝國」「新羅國」と三カ所ある。「安藝國」は國生みの「大倭豊秋津嶋」である。「大倭豊秋津嶋」とは門司大積である。ここへ直接渡ったと考えることもできるが本線は「安藝國」ではなく「出雲」である。この「出雲」とはどこか。その検討は後にして異質な場所について検討しよう。

それは「新羅國」である。「一書(第四)」では「新羅國の曾戸茂梨」に居た。「曾戸茂梨」とは「王都」だと、注(「日本古典文学大系」)は書く。この「新羅國」とは韓半島の新羅國なのか。通常そのように把握されている。だがいきなり韓半島の新羅へ降ったのであろうか。他の「一書」は「出雲」「安藝」と全て“地元”なのに「新羅」では飛躍する。

天照御神や素戔鳴尊が居た天(あま)とは彦島の天國(あまくに)である。ここから追放された素戔鳴尊が「安藝(門司大積)」へ、或いは「出雲」へ渡ったのは自然である。だが「新羅」が韓半島の「新羅」だと想定するのは不自然である。では「新羅」とはどこか。天國(彦島)の近くに「新羅」だと想定できる国が一つある。國生みの一つに「筑紫嶋」がある。この「筑紫嶋」とは門司古城山である。この嶋には四つの弥生国家が存在した。その一つが「筑紫國」である。この国には別名があった。「白日別」である。「白」は「しら」と読むべきであろう。「しら」とは「新羅」である。「新羅」は本来の読みは「しらぎ」ではなく「しんら」であろう。新羅に「ぎ」の音はない。「日」は東の意味を持ち、「別」は分国の意味を持つ。ゆえに「白・日・別」は「新羅の東の分国」という意味となる。「筑紫嶋」の四つの国の中の一つ「筑紫國」は「白・日・別」、つまり「新羅の東の分国」であった。

天國を追放された素戔鳴尊が渡った「新羅」は韓半島ではなく、門司の「白日別」である。素戔鳴尊は天國(彦島)から筑紫嶋の筑紫國へ渡った。筑紫嶋・筑紫(白日別)とは門司港である。

素戔鳴尊は「新羅(門司港)」へ渡った。しかしここは気に入らなかったのであろう。「此の地は吾居らまく欲せじ」と言って他に向かった。次に向かったのが「安藝」であろう。「安藝」は國生みの「大倭豊秋津嶋」である。現在の門司大積である。素戔鳴尊は「新羅(門司港)」へ降り、次に「安藝(門司大積)」へ行き、そして次に「出雲國」の「簸の川上」に行った。

「新羅國」は門司港、「安藝國」は門司大積と特定できる。素戔鳴尊は天(彦島)から先ず「新羅國(門司港)」に渡り次に安藝國(門司大積)を訪れ、最後に出雲國を訪れたと思われる。素戔鳴尊が降臨したと伝えられる三つの国は一見バラバラで相互関係は見えないが、素戔鳴尊はどれか一つの国に降臨したのではなく順次訪れたのである。その行路の最後に到着した國が「出雲」だったという訳である。

ここで有名な「高志の八俣の遠呂智」を退治することとなる。むろん「遠呂智」とは大蛇ではない。八つの頭をもつ大蛇はこの世にはいない。「高志」は國名、「八俣」は地名、「遠呂智」は人名であろう。では素戔鳴尊が最後に訪れた「出雲國」とはどこか。素戔鳴尊が姿を現したのは「島根県・出雲」なのか。残念ながら島根ではありませんでした。

素戔鳴尊が再び姿を現したと伝承に残るのは島根とは遠く離れた小倉南区の「井手浦」であった。「井手浦」とは今まで耳にしたことがない方も多いでしょう。私もHPを見ている中で知りました。この井手浦に出雲の伝承が残っていました。



井手浦の伝承

北九州小倉の町と香春の町をつなぐ街道を「秋月街道」という。その街道の宿場町に「徳力」と「呼野」と呼ばれる町がある。この二つ宿場の中間に「石原町」がある。その町を流れる川を「井手浦川」という。その川の上流に川の名前の由来となった集落がある。それが「井手浦」という集落である。その集落にはその地名の由縁が伝わっている。ここには神武以前の最古の出雲王朝の伝承が生きている。

素戔鳴尊が八岐大蛇を退治する時に、村人が射手として加わり、よって射手裏と称した。

素戔鳴尊が「遠呂智」退治をする時、この村の人たちが射手として参加したと云うのである。なんと素晴らしい伝承であろう。紀元前に素戔鳴尊が「オロチ」を退治した時この村の人が射手として参加した。その事件が村の名前となって二千年以上も伝えられてきている。古代出雲とは島根県に存在したのではない。北九州小倉南区に存在した。この村の人々にとって素戔鳴尊は「オロチ」の圧政から村を救ってくれた恩人であった。故にその事件を代々伝えて感謝してきたのである。素戔鳴尊は出雲國の王となりました。素戔鳴尊の「オロチ」との戦いに参戦した人々の記憶は古代出雲國は井手浦の近く(小倉南区)に存在したことを証言している。

北九州井手浦の人々が島根県出雲まで遠征する理由も動機もない。井手浦の若者たちは自分たちが暮らす出雲の國を脅かす「オロチ」を倒してくれる素戔鳴尊に加担したのである。彼らは自の国、出雲を救うために立ち上がった。その誇らしい戦いの記憶を残すため自らの村を「射手裏」と称したのである。「裏」は意味が通じないが「裏」は「邑」の訛ではないでしょうか。我が村は「射手邑」である。あの「オロチ」と戦った射手の邑である。



(<http://image.search.yahoo.co.jp/search?ei=>)

オロチ退治は岡山県備中地方に伝わる備中神楽の中ではハイライトである。この舞ではオロチは巨大な蛇として登場する。そして「高志の八俣の遠呂智」は酒に酔っぱらって斬り殺される。

井手浦の伝承では村人が弓矢を持って戦いに参加している。当然相手も弓矢を持っていたのであろう。弓矢の応戦となったかどうかは分からないが、弓、矢、刀で武装した「高志」一族と戦ったのが史実であろう。伝承のように酒で接待された「遠呂智」は酔っぱらってしまい敗れてしまった。そして「草薙の剣」の説話が語られる。この鉄製の刀はすばらしく「遠呂智」一族の製鉄技術は高度なものだったということを物語っている。

素戔嗚尊が到着したのは小倉南区

「天(あま)」から門司港に渡り、其処には住みたくないと言って、「安藝(門司大積)」に行き、次に訪れたのが出雲だった。この出雲は島根県出雲ではない。九州天皇家の出雲國、小倉南区であった。貫山の南に位置する「井手浦」の村人が参戦した「オロチ」との戦場は小倉南区であろう。素戔嗚尊は門司大積から周防灘を南下して小倉南区に上陸したのである。

是の時、素戔嗚尊、天より出雲国の簸の川上に降ります。

「出雲国の簸の川上」とは小倉南区である。古代出雲は「天國(彦島)」から遠く離れた島根県ではない。素戔嗚尊は彦島老の山から関門海峡を渡って門司港に着き、次は企救半島を横断して門司大積まで行きました。そこから小倉南区に上陸して、「高志」の国の支配者「遠呂智」を倒し、土地の娘と所帯を持ちました。

古代出雲國の始まりでした。この遠征路は後年、神武が東征した行路とよく似ている。神武は安藝の宮に滞在した後、「吉備(彦島)」に行き安藝に戻り、船で小倉南区へ侵攻していきました。

素戔嗚尊と神武は驚くほど同じような路を進んでいる。



古代出雲國は小倉南区

その後、大國主神(大己貴神))が生まれる。この王が出雲王朝を発展させ大国を築く。

一書(あるふみ)に曰わく、大國主神(おほくにぬしのかみ)、亦の名は大物主神(おほものぬしのかみ)、亦は國作大己貴命(くににつくりおほむちのみこと)と號(まう)す。亦は葦原醜男(あしはらのしこ)を)と曰す。亦は八千戈神と曰す。亦は大國玉神と曰す。亦は顯國玉神(うつしくにたまのかみ)と曰す。其の子181神有す。夫(か)の大己貴命と、少彦名命(すくなびこなのみこと)と、力をあわせ心一つにして、天下(あめのした)を經營(つくる)。復(また)顯見蒼生(うつしきあをひとくさ)及び畜産(けもの)の為は、其の病を療(おさ)むる方を定む。又、鳥獸(とりけだもの)・昆蟲(はうむし)の災異(わざはひ)を攘(はら)はむが為は、其の禁厭(まじなひや)むる法(のり)を定む。是を以て、百姓(おほみたから)、今に至るまでに、咸(ことごとく)に恩賴(のふゆ)を蒙(かがふ)れり。昔、大己貴命、少彦名命に語りて曰わく、「吾等が所造(つくれ)る國、豈(あに)善く成せりと謂はむや」とのたまふ。少彦名命對(こた)へて曰わく、「或るは成せり所有り。或るは成らざるところも有り」とのたまふ。是の談(ものかたりごと)、蓋(けだ)し幽深(ふか)き致(むね)有らし。其の後に、少彦名命、行きて熊野の御崎に至りて、遂に常世郷(とこよのくに)に適(いでま)しぬ。亦曰わく、淡島に至りて、粟莖(あわがら)に縁(のぼ)りしかば、弾かれ渡りまして常世郷に至りましきといふ。これよりのち、國の中に未だ成らざる所をば、大己貴命、独(ひとり)能く巡り造る。遂に出雲國に到りて、乃ち興言(ことあげ)して曰わく「夫れ葦原中国は、本より荒亡(あら)びたり。磐石草木(いはくさき)に至及(いた)るまでに、ことごとくに能く強暴(あしか)る。然れども吾已にくだき伏せて。和順(まつろ)はずといふことなし」とのたまふ

(日本書紀 神代上第八段)



大己貴命と少彦名命は力を合わせ、心を一つにして国営に勤めた。

出雲王朝の中心國の名前が記録されている。「熊野」「常世郷」「出雲國」「葦原中國」である。「熊野」が三重県、「常世」が觀念上の國、「出雲」が島根県、「葦原中國」が不明、このような把握では物語の体を為さない。大己貴命(大國主命)の大國開拓史は統一的に読まれなければならない。

「熊野」は企救半島の「熊野」、「出雲」は小倉南区、「葦原中國」は小倉北区である。「常世郷」は北九州を離れ、恐らく四国であろう。物語の舞台は北九州である。この豊かな出雲王朝の土地に身内とも云うべき「天(あま)國」の一族が侵入し支配下に置いた史実が「天孫降臨」の物語でした。ここに出雲王朝は滅びる。